「アヴァダーナ＝シャタカ」について

岩本　裕

一　序　説

『アヴァダーナ＝シャタカ』Avadānaśataka（以下 Av. と省略する）は『ディヴヤ＝アヴァダーナ』Divyāvadāna と並んで最も早く学界に紹介されたアヴァダーナ文献の一つであるが、その研究に至っては誠に寥々としており、特にわが国に於いては一篇さえないというのが実状であり、わが国に於けるインド仏教研究の跛行性を物語っていると言わねばならない。

さて、Av. に関して最初に紹介したのはフランスのビュルヌフ E. Burnouf である。ビュルヌフはホジソンから贈られたネパール梵文仏典写本に基づき『インド仏教史序説』Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien, Paris 1844. を著わして、その恩に酬いたのであるが、その中で『ディヴヤ＝アヴァダーナ』とともに Av. を紹介した。次いで、ビュルヌフの弟子フェール L. Feer が前述の写本に基づき、

Études bouddhiques. Les livres de cent légendes (Avadāna Çataka). *Journal Asiatique*. 1879, p. 141 ff. p. 273 ff.

を発表したが、これが Av. ならびに関係文献に関する最初の研究であった。フェールはその後もこのアヴァダーナ文献に関する研究をいくつか書いたのであるが、それらは集大成されて彼自身による Av. のフランス語訳

Avadānpçataka, tr. du Sanscrit par L. Feer. Paris 1891.

（*Annales du Musée Guimet*. Tome 18）

の「序説」に収められた。フェールのこの訳はチベット語訳を参照したものであり、Av. の全貌を明かにするとともに、アヴァダーナ文献研究史に於いて、その初期を飾る大著であり、また今日に於いてもなお参考にすべき価値を失っていない文献である。Av. のサンスクリット語原典は、フェールの仏訳の後、十年にして、オランダのスペーイェルによって公刊された。

Avadānaçataka, a century of edifying tales, belonging

to Hīnayāna, ed. by J. S.Speyer, St. Petersburg 1902—1909. (Bibliotheca Buddhica III).

がそれであり、最近リプリントされた（'s-Gravenhage 1958.）。原典の公刊者スペーイェルは、その「序説」に於いて、アヴァダーナ文献の概説を試みるとともに、Av. とその詩形改稿本の Kalpadrumāvadānamālā および Ratnāvadānamālā について詳述し、アヴァダーナマーラー文献の実例として、前者の(2) Yaśomati-avadāna と(10) Subhūti-avadāna のテキストを発表した。次いで Vicitrakarṇikāvadāna の内容を紹介し、Av. との関連を明かにした。なお、Av. のテキストは最近インドでも公刊された。

Avadānaśataka, ed. by P. L. Vaidya, Darbhaṅga 1958. (Buddhist Sanskrit Text. No. 19)

がそれである。Av. に関する研究では、フェールが飜訳を発表した後に

Speyer, J. S.: Buddhas Todesjahr nach dem Avadānaçataka, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 53 (1899), S. 120—124.

のごとき論文があり、初期のインド仏教研究に貢献するところがあった。最近になって

Fa Chaw: Chuan Tsi Pai Yuan King and the Avadānaśataka. *Visva=Bharati Annals*, Vol. 1 (1945), pp. 35—55.

Bagchi, P. C.: A Note on the Avadānaśataka and its Chinese Translation, *ibid.* pp. 56—61.

の二篇があり、『撰集百縁経』とその一二の説話が飜訳され紹介された。

さて、『撰集百縁経』は『アヴァダーナ=シャタカ』の漢訳とされる。『撰集百縁経』の原名がアヴァダーナ=シャタカと称したことは疑いないとしても、訳者支謙（三世紀）が訳出に際して依拠した原典の『アヴァダーナ=シャタカ』が現行の Av. と異なっていたことは、両者を対照してみると明瞭である。すなわち、両者で対応しない説話として、Av. には(24) Daśaśiras. (26) Śītaprabha. (36) Maitrakanyaka. (78) Kacaṅgalā があり、『撰集百縁経』には(24) 老母善愛慳貪縁、(30) 劫賊悪奴縁、(40) 劫賊曹陀縁、(80) 盗賊人縁の四篇がある。そして、この互いに対応しない説話の番号からも察せられる通り、両者の説話の順序に差違が見られる。また、互いに対応する諸説話に於いても、説話の結構では軌を同じくしながらも、固有名詞の一致しないもの、一方に見える固有名詞で他方に見えないものなどが、いくつか指摘される。こうして、Av. と『撰集百縁経』とは、その編纂方針、説話の選定などに於いて一致しているが、内容に若干の前後出入のあることが知られ、両者は異系の伝本であることが知られる。この問題については後に詳述することにして、まず現行の Av. の分析から問題の緒をほどいていきたい。

二　『アヴァダーナ=シャタカ』の組織と内容

さて、現行の Av. は十章に分たれ、各章におのおの十篇の説話が

含まれ、合計百篇の説話から成っている。しかも、各章はそれぞれに特別のテーマを取扱っており、極めて整然たる編纂形式を採っていることが知られる。すなわち、まず初めの四章は如何なる行為によって人間がブッダ（仏）やプラティエーカ=ブッダ（辟支仏）になることができるかを説いた説話を集めている。その中で、第一章と第三章の大部分は仏教でいう授記 vyākaraṇa（すなわち予言）の内容を持ち、各層の人間が敬虔な行為によって仏を礼拝し、その功徳によって未来劫に於いてブッダあるいはプラティエーカ=ブッダになることを仏から予言されるのである。次に、第二章と第四章の諸説話は本生譚 jātaka ないしはそれに類する説話から成り、ある敬虔な行為に関する物語を語った後に前生物語が仏によって述べられ、この因縁物語の主人公こそ前生に於ける仏にはほかならない旨の結合句が述べられている。これに対し、第五章以下の説話の多くに於いては「その時の何某は現在の何某である」という結合句の述べられることが著しい対照をなしている。まず、第五章は一種の餓鬼事で、ある長老（主として Maudgalyāyana 目犍連尊者）が餓鬼を見て、その訳を訊ねる。餓鬼は「仏は問え。」という。仏は餓鬼となった人の前生に於ける罪業——布施を拒絶したとか、聖者を誹謗したとか——の物語をするという形式をとっている。第六章はある敬虔な行為によって天界に生れた者の物語である。次に、第七章以下の四章は如何なる行為によって人々は阿羅漢果などの果報を得ることができるかを示す物語で、主人公によって章が区別されている。すなわち、第七章はシャカ族の人、第八章は女性、第九章は種々の人々、そして第十章は過去世に於ける悪行にも拘わらず敬虔な行為によって果報をえた人々を主人公として物語が展開し、それぞれに前生物語が語られている。しかも、第七章以下の諸説話はほぼ同一の形式で物語られて、Av. に於ける最も多い説話形式となっていることが注目される。

三　『アヴァダーナ=シャタカ』に於ける説話の形式

以上に述べたように、Av. に於ける説話は一定の計画の下に整理編纂されているのであるが、それと同時に各説話は一定の常套句で状況の描写が行われているのであって、その最も長い句は仏の微笑の記述で、スペーイェルの刊本に於いて実に二十八行に達している。また、各説話の冒頭には必ず

「仏世尊は国王・大臣・富豪・市民・協同組合長・商人・天神・竜・夜叉・アスラ・ガルダ・キンナラ・マホーラガたちによって、敬まわれ、尊ばれ、崇められ、祀られていた。天神・竜・夜叉・アスラ・ガルダ・キンナラ・マホーラガに讃嘆され、声名高く偉大な福徳のある仏世尊は、衣服・飲食物・臥具・医療品の必需品を受け、僧団の弟子衆とともに……（地名）……近くにある……（地名）……に逗留していた。

と記され、末尾には（41）—（52）を除いて）

「満足した世尊はかく語り、彼等僧たちは世尊の言葉に歓喜した。」

と記されるなど、同一の文句の繰返しが多いのである。最近 Av. の原典を公刊した Vaidya は、このような常套句を二十六種 挙げているのであるが、このような同一の文句が繰返し記されているにもかかわらず、その用い方に明瞭に区別の認められることが注意されねばならない。例えば、前述の仏の微笑を描写する文句は大体に於いて授記に関する説話に限られているなど、それである。いま、この点に留意しながら、説話の形式を区別するために重要な項目の有無を各説話に就いて検討し、それを表示すると、次のようである。

〔注意〕 過去仏の欄にVとあるのはヴィパシイン Vipaśyin（毘婆尸）仏、K とあるのはカーシャパ Kāśyapa（迦葉）仏である。なお、それらに括弧のついているものについては、後述するところを見よ。

	① 仏の微笑の描写	② 「業は百劫を経るとも消えず」の偈頌	③ 前生物語	④ 過去仏の名	⑤ 業に関する教説
(1)	○				
(2)	○				
(3)	○				
(4)	○				
(5)	…	…	…	……	…
(6)	○				
(7)	○				
(8)	○				
(9)	○				
(10)	○				
(11)			○	Bhagīratha	
(12)			○	Brahmā	
(13)		○	○	Candana	
(14)		○	○	Candra	
(15)		○	○	Indradamana	
(16)		○	○	Ratnaśaila	
(17)	○	○	○	Prabodhana	
(18)		○	○	Indradhvaja	
(19)		○	○	Kṣemaṁkara	
(20)	○	○	○	Pūrṇa	
(21)				(K)	
(22)	○				
(23)	○				
(24)		○	○	V	
(25)	○				
(26)	○				
(27)	○				
(28)	○				
(29)	○				

	①	②	③	④	⑤
(30)	○				
(31)		○	○		
(32)			○		
(33)			○		
(34)			○		
(35)			○		
(36)			○		
(37)			○		
(38)			○		
(39)		○	○		
(40)		○	○	K	
(41)			○		○
(42)			○	K	
(43)			○	K	
(44)			○		
(45)					
(46)					
(47)			○	K	
(48)					
(49)			○		
(50)		○	○	Krakucchanda	
(51)				(K)	
(52)			○	(K)	
(53)					
(54)					
(55)					
(56)		○	○	K	○
(57)					
(58)		○	○	K	
(59)			○	K	
(60)		○	○	K	○
(61)		○	○	V	○
(62)		○	○	V	○
(63)		○	○	V	○
(64)		○	○	V	○

	①	②	③	④	⑤
(65)		○	○	V	○
(66)		○	○	V	○
(67)		○	○	V	○
(68)		○	○	V	○
(69)		○	○	V	○
(70)		○	○	V	○
(71)		○	○	V	○
(72)		○	○	K	○
(73)		○	○	K	○
(74)		○	○	K	○
(75)		○	○	Krakucchanda	○
(76)		○	○	Kanakamuni	○
(77)		○	○	K	○
(78)		○	○	(K)	○
(79)		○	○	K	○
(80)		○	○	(K)	○
(81)		○	○	(K)	○
(82)		○	○	V	○
(83)		○	○	K	○
(84)		○	○	K	○
(85)		○	○	K	○
(86)		○	○	V	○
(87)		○	○	Krakucchanda	○
(88)		○	○	V (K)	○
(89)		○	○	(K)	○
(90)		○	○	(K)	○
(91)		○	○	K	○
(92)		○	○	K	
(93)		○	○	K	○
(94)		○	○	(K)	○
(95)		○	○	K	○
(96)		○	○	(K)	○
(97)		○	○	(Puṣya)	○
(98)		○	○	(K)	○
(99)		○	○	(K)	○
(100)		○	○		○

さて、Av. の百篇の説話の中で、(5)はテキストが亡失しており（上欄に於ける記述は漢訳およびチベット語訳による）、また(100)は後述するように特殊の立場をとるので、いま説話の形式を論ずるにあたっては、一応考慮外とする。

茲に於いて、他の九十八篇の説話について、その形式を分類してみると次の四種類に分たれることが知られよう。すなわち、

第一類　アヴァダーナ

〔その一〕九十八篇の中で最も数の多い形式は、②③④⑤の四項を含むもので、

(56)、(60)—(77)、(79)、(82)—(88)、(91)、(93)、(95)

の三十篇である。すなわち、仏がある土地に滞在していたときに、ある希有な事件が起る。不思議の念を生じた僧侶たちが、その因縁を仏に訊ねる。仏は、その因縁を説くにあたって、

たとい百劫を経るとも、業は消ゆることなし。
機縁を得て、また時を得て、
肉身ある者に、必ずや実を結ぶ。

という偈頌（上記②）を述べ、続いて

「嘗て、過去九十一劫の昔に、ヴィパシインと名づくる仏がこの世に出て……

と、過去仏の名が挙げられ（上記④）、引続き前生物語（上記③）が記される。この場合、カーシャパ仏であれば「過去二万年の昔、バドラ=カルパに……」と記され、クラクッチャンダ仏の場合には「過去四万年の昔に……」と記される。しかも、茲に注意すべきは、すべて過去七仏に属するヴィパシイン、クラクッチャンダ、カナカムニおよびカーシャパの四仏に限られており、就中ヴィパシイン仏が十四篇の説話に、またカーシャパ仏が十三篇の説話に登場している。かくして、前生物語の後に、仏は結合句を述べて、現世物語の主人公と前生物語とを結びつけて因果関係を明かにし、そして最後に

「完全に黒い所行の果実は完全に黒く、完全に白い所行の果実は完全に白く、雑色のもののそれは雑色である。従って、僧たちよ、汝等は完全に黒い所行と雑色のものとを捨て去って、完全に白い所行のみを努めるべきである。このように、僧たちよ、汝等は学び知るべきである。」

と、業に関する教説（上記⑤）を説くのである。

さて、この説話の形式を見るとき、余が嚮にテキストを公刊した単行のアヴァダーナ文献『スマーガダー=アヴァダーナ』[1] Sumāgadhāvadāna と同一形式であることが知られる。すなわち、『スマーガダー=アヴァダーナ』に於いては、給孤独 Anāthapiṇḍada 長者の娘スマーガダー Sumāgadhā がブンドラヴァルダナ Puṇḍravardhana に嫁ぎ、ジャイナ教徒である夫の一家を改宗させるために仏の降臨を招請し、仏および仏弟子の奇蹟によって夫の一家ならびにブンドラヴァルダナの市民を仏の教えに帰依させる物語が語られるのであるが、この現世物語に引続き、奇異の念に駆られた僧たちに対し、仏はまず「業は百劫を経るとも消えず」という偈頌（上記②）を述べ、続いてスマーガダーの前生として、カーシャパ仏（上記④）出

世のときに於けるペナレス王クリキン Kṛkin の王女カーンチャナマーラー Kāñcanamālā に関する物語（上記③）が物語られ、最後に「完全に黒き所行の果実は……」と、業に関する教説（上記⑤）が説かれている。

また『ディヴヤ＝アヴァダーナ』は現行刊本を見るとき、種々の形式をもつ種々雑多な内容をもつ三十八篇の説話の集録であるが、現存の諸写本を綿密に対照するとき、その始源的形式は(1) Koṭikarṇavadāna と(2) Pūrṇāvadāna の二篇から成るもの（あるいはこの二篇を冒頭におくアヴァダーナ集が Divyāvadāna または Divyāvadānamālā と呼ばれた）と考えられる。[2] そして、この二篇のアヴァダーナを見るとき、(1) Koṭikarṇa に上記②の偈頌のない点のみ異なり、他はすべて同一の形式を踏襲している。従って、これらの点から見て、アヴァダーナの説話形式は、その完成された形に於いて、上記②③④⑤を具えた形式のものと言うことができよう。

しかも、茲に注意すべきことは、これらの説話に於いて、物語の主人公がシャカ族その他の人々であり、『スマーガダー＝アヴァダーナ』に於いては敬虔な信者スマーガダーであり、『ディヴヤ＝アヴァダーナ』の冒頭の二篇に於いては仏の高弟シュローナ＝コーティカルナでありプールナである点である。すなわち、ジャータカが仏の前生をテーマとしているのに対し、アヴァダーナに於いては仏弟子・敬虔な信者たちが主人公とされ、その前生に於ける因縁が物語られているのである。しかも、この際に三つの特徴が見られる。まず第一は、ジャータカでは現世物語は簡単に記述されて過去世物語すなわち前生物語が重視されているに対し、アヴァダーナに於いては現世物語が重視されて、その因縁を説明するものとして前生物語が述べられているに過ぎない。次に、第二の特徴として、アヴァダーナに於いて、前生物語は比較的簡単に述べられているにも拘わらず、過去仏が必ず登場していることである。しかも、この場合の過去仏はいわゆる過去七仏の誰かで、前述のように特にヴィパシインあるいはカーシャパの登場することが著しく多い。パーリ語所伝の『ディーガ＝ニカーヤ』Dīghanikāya (14)のマハー＝パダーナ＝スッタンタ』Mahāpadānasuttanta に於いて過去七仏の伝記が述べられていることは、過去七仏に関する説話がアパダーナ apadāna (avadānaのパーリ語形)[3] と名づけられたことを意味すると考えられるのであるが、われわれがいま問題としているアヴァダーナ説話は、その中に過去七仏のいずれかが登場するが故にこそ、アヴァダーナの名が附けられたのではないかと考えられよう。第三の特徴は、ジャータカに於いては結合句に於いて

「そのときの……（人名）……は、すなわち我であった。」

と、仏が必ず前生物語に於ける徳行の高い人物を自分に比定するに対し、アヴァダーナに於いては結合句に於いて、

「そのときの……（人名）はすなわち……（現世物語の主人公）であった。」

と、仏が必ず前生物語に於ける徳行あり敬虔な人物を現世物語の主人公に比定している点である。こうして、アヴァダーナとは「仏弟子あるいは敬虔な信者を主人公とし、その前生物語に於いて過去七

仏の誰かが登場する説話」というべきである。

〔その二〕前述の第一類その一すなわち本来のアヴァダーナと名づけられるべき説話と極めて近い関係にあるのが、

(78)、(80)、(81)、(89)、(90)、(94)、(96)—(99)

の十篇で、これらの説話に於いては前生物語の冒頭が前記の諸説話と異なり、

「昔て、過去に、ヴァーラーナシーの都に、ひとりの乞食がいた。飢のために身体は痩せ細って、あちらこちらとさまようていた。……(89)

のごとく始まり、その中に

「しかも、カーシャパ仏の許で出家した。」

という句が見られるのである。従って、この一群に於いても、前生物語に過去七仏のいずれかが、特にカーシャパ仏が登場しているのであり（ただし、(97)のみプシャ仏が登場し、例外となっている）、前記第一類その一に準ずるものとして、アヴァダーナ説話と言いえよう。（このグループに属する説話に登場する過去仏は前掲の表において括弧を用いて区別した。）

〔その三〕次に、前生物語にヴィパシイン仏あるいはカーシャパ仏のいずれかが登場しながら、上記⑤の業に関する教説の見えないものとして、

(24)、(40)、(50)、(58)、(92)

の五篇があり、さらにこの形式から②の欠除した形式のものに

(21)、(42)、(43)、(47)、(52)、(59)

の六篇がある。いずれもアヴァダーナ説話として展開する過程にある説話というべきである。嚮に言及した『ディヴヤ＝アヴァダーナ』(1)も、このような段階にある説話というべく、上記②を欠き、③④⑤を具えている。

第二類　ジャータカ

〔その一〕嚮に述べたように、(11)から(20)に至る十篇は仏の前生物話すなわちジャータカ（本生譚）であるが、この中で最も普通の形式は上記②③④を具えたもので、

(13)—(16)、(18)、(19)

の六篇であり、

(11)、(12)

の二篇は②を欠いている。特に注意されるのは

(17)、(20)

の二篇で、上記①②③④を具える形式で、①が嚮に言及したように仏の微笑に関する常套句として授記の説話に特徴的な文句であることから、この二篇はジャータカとヴヤーカラナの中間形ということができよう。

これら十篇の説話に特徴的なことは、各説話にそれぞれ過去仏が登場することであるが、いわゆる過去七仏に属するものは全くいない。次に、すべて結合句には、「そのときの……（人名）……は、すなわち我であった。」と記され、パーリ語所伝のジャータカ説話に於ける結合句と同一形式を踏襲している。

〔その二〕次に、前生物語はあるが過去仏は登場せず、しかも結

合句に於いて前者と同一形式をとるものに

(32)—(38)

の七篇があり、これに②の偈頌の加えられたものとして

(31)、(39)

の二篇がある。これらの諸篇に於いては、因縁物語の冒頭に

「嘗て、過去に、ヴァーラーナシーの都城に、ブラフマダッタという王が統治していた。」

と、パーリ語所伝のジャータカと同一の形式を採っており、恐らくはジャータカ本来の形式と考えられる。これに対し、前項の過去仏の登場するジャータカは過去仏の信仰の展開とともに展開した説話と考えられよう。

第三類　ヴヤーカラナ

この種類に属する説話は上記①のみを共通にし、内容的には仏の授記（予言）の文句が見られるものであって、

(1)—(4)、(6)—(10)、(22)、(23)、(25)—(30)

の十七篇がこれに属する。

第四類　その他

次に、

(45)、(46)、(48)、(53)—(55)、(57)

の七篇は、上記①②③④⑤のいずれも有せず、独自の説話形式をとっている。この説話形式が如何なる名称で呼ばれるべきか明確でないが、九分教ないしは十二分教の分類に従うとすれば、イティウクタカ ityuktaka（あるいはイティヴリッタカ itivṛttaka）と称すべきかと考えられるが、[4] 明確でない。なお、

(44)、(49)

の二篇は、これに前生物語（上記③）の加わったものであり、

(41)

の説話は、それにさらに⑤すなわちカルマンに関する教説の加わったものであって、恐らくはイティウクタカからアヴァダーナへの推移の過程にある説話形式ということができよう。

さて、フェールは Av. の内容からアヴァダーナを五種に分類した。[5] すなわち、

一、Avadānas proprement.（本来のアヴァダーナすなわち過去のアヴァダーナ）……52

二、Avadānas-jātaka.（ジャータカとしてのアヴァダーナ）……23

三、Avadānas du présent（現在のアヴァダーナ……）5

四、Avadānas de l'avenir（未来のアヴァダーナすなわちヴャーカラナとしてのアヴァダーナ）……18

五、Avadānas mixtes（前記一と四の混合したアヴァダーナ）……2

の五種である。この分類を見るとき、フェールは『アヴァダーナ＝シャタカ』に含まれるが故にすべての説話はアヴァダーナであると解し、アヴァダーナ文献とアヴァダーナ説話とを区別しなかったことが窺われる。従って、仏弟子あるいは敬虔な信者を主人公とし、過

去七仏の登場する物語を含む説話がアヴァダーナであることに気づかず、またジャータカの本質が仏の前生物語であり、アヴァダーナとは根本的に異なることを理解しえなかったのではないかと考えられる。事実、アヴァダーナ文献としての Av. には前述のように各種の説話を包含しているのであるが、これは『ディヴヤ=アヴァダーナ』など他のアヴァダーナ文献はいずれも同じであり、それらのアヴァダーナ文献とそれらの中核をなすアヴァダーナ説話とは厳重に区別されねばならないと考えられる。従って、いまの場合、フェールは彼が Avadānas proprement と分類しているものに於いてこそ、アヴァダーナ説話の本質が究明されるべきであったことは明かである。

四　『アヴァダーナ=シャタカ』の構成

さて、この立場から Av. の構成をもう一度検討してみる必要があろう。まず第一に、前述のような形式と内容とをもつアヴァダーナ説話が Av. の中核でなければならない。すなわち、(60)—(99)の四十篇が Av. の中核であると言わねばならぬ。また、別に、(1)—(10)の夾雑物のないヴヤーカラナのグループと、(11)—(20)の同じく夾雑物のないジャータカのグループのあることが認められる。次に、(21)—(30)のグループは前述のようにヴヤーカラナに属するが、編纂に際して若干の混乱があると見るべきであろう。(41)—(59)のグループも同様で、(60)以下の説話集に附随させたものと考えられる。最も問題になるのは(31)—(40)のグループで、パーリ語所伝のジャータカと同形式のものであり、フェールが古典的ジャータカと呼んでいるものであって、事実(34)「シビ王」、(36)「マイトラカヌヤカ」、(37)「兎」のごとくパーリ語所伝に名高いジャータカ説話が包摂されている。しかし、Av. の詩形改稿本の Kalpadrumāvadānamālā および Ratnāvadānamālā とに於いては、(31)—(40)の諸説話は当初のパラフレイズの選定の中に這入っていない。すなわち、Kalpadrumāvadānamālā は Av. の(100)を(1)とし、以下各章の第一説話ついで第二説話を詩形にパラフレイズして収録しているのであるが、(31)と(32)とを除外している。同様に、各章の第三説話ついで第四説話を詩形にパラフレイズして収録している Ratnāvadānamālā に於いても、(33)と(34)とを除外している。このことは、この二種の詩形改稿本の原初形が編述されたときに、(31)—(40)の一群の古典的ジャータカが Av. の中に包摂されていなかったことを示すものと考えられる。

次に、また、この(31)—(40)の一群を『撰集百縁経』の第四章と対照してみるとき、その順序の異同は他の章に見られないほどに甚だしい。すなわち、いま Av. を標準にして記すと、

(31) Padmaka.　(三一) 蓮華王捨身作赤魚縁
(32) Kavaḍa.　(三二) 梵豫王施婆羅門穀縁
(33) Dharmapāla.　(三九) 法護王子為母所殺縁
(34) Śibi.　(三三) 尸毘王剜眼施鷲縁
(35) Surūpa.　(三四) 善面王求法縁
(36) Maitrakanyaka.

(37) Śaśa.　(三八) 兎燒身供養仙人緣
(38) Dharmagavesin.　(三五) 梵豫王太子求法緣
(39) Anāthapiṇḍada.　(三六) 婆羅門從仏索債緣
(40) Subhadra.　(三七) 仏垂般涅槃度五百力士緣

となる。このことは、Av. の成立に際して第四章が最後まで説話の選定と収載の順序が決定しなかったことを示すものと言えよう。以上、二つの理由から、第四章が Av. に於いて最後の成立であることが知られよう。

しかも、茲に注意すべきことは、Av. は第四章の終りに段落の認められる事実である。既に前述したところから知られる通り、(1)—(40)と(41)以下とは構成を異にするのであるが、(40)の末尾にコロフォンが見られ、他の章末にその見えないことは、この事実を明白に物語るものといわねばならない。すなわち、スペーイェル刊本を見ると、その依拠した写本 Cambridge MS. Add. 1611. には、(40)の末に

avadānaśatake caturthi udānagāthā(*sic*)bodhisatvajātakānām samāptaḥ.

「アヴァダーナ=シャタカに於ける菩薩本生譚の第四ウダーナ=ガーター終る。」

と記される。茲に見られる udānagāthā という語の意義は今の場合不明確であるが、少くともこのコロフォンは(1)—(40)の説話群（すなわちヴヤーカラナとジャータカ）が(41)以下と本質的に異質のものであることを明かにしていると思われる。それと同時に、(40)の説話の前半は Mahāparinirvāṇasūtra（大般涅槃經）に於けるスバドラ Subhadra 説話(?)の引用であって、後半（スペーイェル刊本二三四頁八行目以下）と主人公を同じくしながらも直接の関係が認められず、且つこの後半が『撰集百縁經』(37)の説話とパラレルなことから見て、(40)の説話の構成が二重になっており、改稿の手によって原型に於けるのとは異なったものとなったことを想像させる。しかも、Mahāparinirvāṇasūtra からの引用は(100)の説話の冒頭にも見られるのであり、両者に共通した改稿の跡を窺わせるに十分である。そして、(100)の説話こそ明瞭に改作の跡を示しているのであって、Av. 成立の秘密の一端を洩らしていると考えられる。

五　『アヴァダーナ=シャタカ』と『撰集百縁經』

嚮に「序説」に於いて、Av. と『撰集百縁經』とが、その編纂方針・説話の選定などに於いて一致してはいるが、内容に若干の出入があり、説話の順序にも前後のあることから、両者の異系であることを指摘したのであるが、前節までの記述によって両者の所伝が異なることは明かであると言わねばならぬ。しからば、両者の系統は辿りえられるであろうか。もとより、それを明確に示す資料は、なんら知られていないのであるが、それを示唆する点がないではない。それは Av.(100) Saṁgīti と『撰集百縁經』第百の「孫陀利端正縁」とを比較してみるとき、両者は説話の結構を同じくしながら

も、前者には明かに意図的な改稿の跡が認められるからである。

さて、Av.(100)「サンギーティ」（法の宣示）は、嚮に述べたように、まず冒頭に Mahāparinirvāṇasūtra をそのまま引用して、仏の入滅の次第を述べ、次いで

「仏世尊の涅槃の後、百年にして、パータリプトラの都にアショーカ Aśoka 王が統治していた。」

と、物語全体をアショーカ王の時代のものとする。その頃、ガーンダーラ Gāndhāra のプシュパ＝ペーローツァという村にスンダラという眉目秀麗な息子が生れ、この子の行くところは何処にでも蓮池と遊園が生じた。アショーカ王はスンダラの噂を聴き、会いに行くという。村民たちは王に来られることを怖れ、スンダラを首都に行かせる。アショーカ王はスンダラ少年の美しい容姿と勝れた風采と、神神しい蓮池と遊園の生じたのを見て、非常に不思議に思うた。その訳を知ろうと思い、王は少年を連れて、クックタ園のウパグプタ Upagupta 長老の許に行く。長老の説法を聴き、スンダラ少年は王の許諾をもとめて長老の許で出家し、専心に修行し、忽ちに阿羅漢位を得た。アショー力王はいぶかしく思い。ウパグプタ長老に因縁を訊ね、ウパグプタ長老がそれを物語るのであるが、前生物語の時代は仏が涅槃した後とされる。

以上は「サンギーティ」の物語の梗概であるが、この説話は他のアヴァダーナ説話と同一の説話形式をとりながら、他と明確に異ることが知られる。すなわち、Av. の他のアヴァダーナ説話はすべて仏の同時代とされ、仏が過去仏のときに於ける因縁について物語り、結合句を述べて、教えを垂れるのである。これに対し、「サンギーティ」説話のみはアショー力王の時代とされ、ウパグプタ長老が結合句を述べ、因縁を物語るとされる。すなわち、時代がずらされているのである。[8] これが如何なる事情に基づくか、それを検討する必要があるが、それに先だって『撰集百縁経』の所伝をみなければならない。

さて、『撰集百縁経』第百「孫陀利端正縁」を見ると、主人公の名は同系であるが、仏の時代とされ、アショーカ王ではなくして波斯匿 Prasenajit 王が登場する。物語の内容は「サンギーティ」と同じであるが、孫陀利少年の前生物語は迦葉（カーシャパ）仏のときとされ、それを説くのは仏みずからである。すなわち『撰集百縁経』第百の説話は仏の時代の物語とされ、他のすべての説話と時代を同じくしており、従ってこの所伝には統一があり、この所伝がこのアヴァダーナ集の本来の姿であることを結論させる。この点から観察すると、(100)「サンギーティ」の所伝は後代の改作であると言わねばならない。この場合、この改作に於いて、われわれの注意を惹くことは、因縁を物語る話者がウパグプタ長老とされている点である。すなわち、この改作にあたっては、ウパグプタ伝説が Av. の伝承に採り入れられたのである。

さらに、Av.(100)の説話の改作に関して重要な事実は、Av. の詩形改稿本の一つ Kalpadrumāvadānamālā がこの説話のメトリカル＝パラフレイズをもって(1)とし、しかも全体をウパグプタ長老がアショーカ王に物語るという枠の中に挿入していることである。しか

も、その後のアヴァダーナ文献は Kalpadrumāvadānamālā に次ぐ Ratnāvadānamālā をはじめとして、殆んどすべてウパグプタ長老がアショーカ王に物語るところとされている。このことは、アヴァダーナ文献がウパグプタ長老の権威を認めていることを意味する。ウパグプタ長老は諸伝ひとしくマトゥラーに於いて教化活動を続け、後にアショーカ王の師となったと伝える。[9] マトゥラーはアショーカ王の時代以後に於いては説一切有部の中心であり、その地から弘く西北インド一帯に拡がり、西暦二世紀の頃には有部は現在のペシャワール一帯の地域、カシミールの西部、マトゥラー、シュラーヴァスティーに広まっていたことが知られる。[10] この歴史事実から推して、ウパグプタ長老が説一切有部の長老であるとすれば、改作に際してウパグプタ長老を採り入れた現行の Av. は説一切有部の所伝ということになるであろう。

しからば、第百の説話が改作される以前の『アヴァダーナ・シャタカ』あるいは『撰集百縁経』が訳出されるに際して用いられた原典は、如何なる部派――いま仮りにこの語を用いることにする――所伝であったのであろうか。訳者支謙は月支国の出身者の子孫であることから、『撰集百縁経』の原本は大月氏すなわちクシャン帝国に於ける一伝本であったと考えられよう。とすれば、前述のように、西暦二・三世紀の頃にクシャン帝国には説一切有部が広く行われていたのであるから、『撰集百縁経』の原本もまた説一切有部の所伝と考うべきであろう。しかし、両者の関係が全く不明であることは、いまさらに言うまでもない。それとも、『撰集百縁経』の原本は他の部派の所伝であったのであろうか。後考を俟ちたい。

（一九六一・一二・二四）（京都大学文学部講師）

註

（1）Sumāgadhāvadāna, Revised Edition by Y. IWAMOTO, Tokyo 1959.（『東海大学文学部紀要』第一号）

（2）この点に関しては、これを詳論する別の機会を持ちたい。

（3）なお、Das Mahāvadānasūtra. Ein Kanonischer Text über die sieben letzten Buddhas. Sanskrit, verglichen mit dem Pāli nebst einer Analyse der in Chinesischer Übersetzung überlieferten Parallelversionen, auf Grund von Turfan-Handschriften, hrsg. von Ernst WALDSCHMIDT, 2 Teile, Berlin 1953, 1956.（Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst, Jahrgang 1952 Nr. 8 und 1954 Nr. 4）参照。

（4）九分教ないしは十二分教の分類に於いて、説話的要素を含むものといえば、jātaka, vyākaraṇa, nidāna, avadāna, ityuktaka (itivṛttaka), adbhuta の六種であって、これによって仏教の説話文字は総括されると考えられる。いまの場合、adbhuta（奇蹟物語）は問題外であり、また前述の jātaka, vyākrraṇa および avadāna を除き、nidāna はヴィナヤの因縁物語と考えられるので（Bhaiṣajyavastu, ed. N. DUTT. に

於いて nidāna という語の用法を検討せよ)。この種の説話が ityuktaka あるいは itivṛttaka と称せられたと考えられる。なお、詳論する別の機会を持ちたいと考えている。

(5) FEER, L.: Avadāna-Çataka, Introduction pp. XIII—XIV.

(6) *cf.* FEER, L., *Journal Asiatique* 1879, p. 305.また、TAKAHATA, K.: Ratnamālāvadāna, Tokyo 1954, Introduction p. viii—ix. Synoptical Table of the Parallels in Avadānaçataka and Avadānamālās. を見よ。

(7) *cf.* Das Mahāparinirvāṇasūtra. Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pali nebst einer Übersetzung der chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādins, auf Grund von Turfan-Handschriften herausgegeben und bearbeitet von Ernst WALDSCHMIDT, 3 Teile, Berlin 1950—1951, S. 366—382.

(8) *cf.* WINTERNITZ, M.: A History of Indian Literature, Vol. II, Calcutta 1933, p. 283.

(9) *s.* PRZYLUSKI, J.: La légende de l'empereur Açoka (Açoka avadāna) dans les textes indiens et chinois, Paris 1923.

(10) BAREAU, A.: Les sectes bouddhiques du Petit Véhicule, Saigon 1955. p. 131—132.